

## 「何のために働くのか？」③

年 組 番

氏名

三浦雄一郎

大学時代は獣医学を学び、卒業後は母校で助手として勤務しましたが、1年で辞めました。スキーマの日本代表としてオリンピックに出たいという子どものころからの夢に懸けたからです。ところが、青森県の代表枠を巡ってスキー連盟の方針に異議を唱えたことからアマチュア選手の資格を奪われ、オリンピックどころか、国内の大会にも出場できなくなってしまったんです。オリンピック代表の道は閉ざされ、大学に戻ることもできない。夢をあきらめようとは思いませんでしたが、足がかりもなく、先の見えない日々が数年続きました。そんな時に、アメリカで開催された第1回世界プロスキー選手権大会（1961年）を報じた新聞記事を読み、「コシだ」と。「日本一にはなれなくても、世界一にはなれる」と発奮。資金をかき集めて翌年のプロスキー選手権大会に参加。世界の強豪選手たちと競い、なんとか8位に食い込みました。でも、世界一にはまだ遠い。次に目をつけたのがイタリアのキロメートルランセ。直滑降でスピードを競う競技で、過去に日本人の出場者はいませんでした。出場にあたっては、ただトレーニングをするだけでは自分に勝ち目はないと考えました。そこで、科学の力を利用しようと思い立ち、防衛庁航空研究所にかけあって空気抵抗の少ないウェアを開発。時速172.084キロメートルの世界新記録（当時）を達成しました。その後も、エベレストからのパラシュート直滑降、世界七大陸最高峰のスキー滑降、世界最高齢のエベレスト登頂と常に新しいことに挑戦してきました。よく「なぜ命を懸けて冒険をするのですか？」と問われますが、好奇心があるからです。記録の樹立を目指すというよりは、誰もやったことのない、新しいアイデアを形にしていくことが面白くてそのときどきの自分のベストを尽くしてきました。それは「冒険」に限りません。僕は20代前半で結婚して妻子がいましたから、30代前半まで山での荷物運びやスキースクールのインストラクター、スポーツ用品会社の営業などの仕事で食いつなぎました。生活の糧にと始めた仕事ですが、それぞれやりがいがありましたよ。スポーツ用品会社では営業成績はトップクラスでした。どこに飛び込んでも、自分の与えられた仕事に夢中になって、ベストを尽くす。マニュアルのようなものがあっても、それを超えるものがあるんじゃないかと想像し、やってみる。そういう姿勢で仕事をした方が退屈しないしマンネリに陥りません。仕事というのは自分のオリジナルのものが見つかれば、意欲がまったく変わってきますよ。

1932年、青森県生まれ。56年、北海道大学獣医学部卒業後、同大学の助手として1年間勤務。1964年イタリア・キロメートルランセに日本人として初めて参加、時速172.084キロという当時の世界新記録樹立。1985年世界七大陸最高峰のスキー滑降を完全達成。2013年に80歳7カ月で3度目のエベレスト登頂〔世界最高年齢登頂記録更新〕を果たす。

（出所）就職ジャーナル「仕事とは？」から抜粋。

